

芥川龍之介

アググニの神



アグニの神

一

支那の上海の或町です。昼でも薄暗い或家の二階に、人相の悪い印度人の婆さんが一人、商人らしい一人の亜米利加人と何か頻しきりに話し合っていました。

「実は今度もお婆さんに、占いを頼みに来たのだがね、

—」

亜米利加人はそう言いながら、新しい煙草たばこへ火をつけ

ました。

「占いですか？　占いは当分見ないことにしましたよ。」

婆さんは嘲あざけるように、じろりと相手の顔を見ました。

「この頃は折角見て上げてても、御礼さえ碌ろくにしない人が、多くなつて来ましたからね。」

「そりや勿論御礼をするよ。」

亜米利加人は惜しげもなく、三百弗ドルの小切手を一枚、婆さんの前へ投げてやりました。

「差当りこれだけ取って置くさ。もしお婆さんの占いが当れば、その時は別に御礼をするから、——」

婆さんは三百弗の小切手を見ると、急に愛想あいそがよくありませんでした。

「こんなに沢山頂いては、反かえって御氣の毒ですね。——
そうして一体又あなたは、何を占うつてくれるとおっしゃるんです？」

「私が見て貰もらいたいののは、——」
亞米利加人は煙草くわを啣くわえたなり、狡猾こうかつそうな微笑を浮べました。

「一体日米戦争はいつあるかということなんだ。それさえちやんとわかっているれば、我々商人は忽たちまちの内に、

大金儲けが出来るからね。」

「じゃ明日あしたいらっしやい。それまでに占って置いて上げますから。」

「そうか。じゃ間違いのないように、——」

印度人の婆さんは、得意そうに胸をそ反らせました。

「私の占いは五十年来、一度も外はずれたことはないのですよ。何しろ私のはアグニの神が、御自身御告げをなさるのですからね。」

亜米利加人が帰ってしまうと、婆さんは次の間の戸口へ行つて、

「えれん惠蓮。惠蓮。」と呼び立てました。

その声に応じて出て来たのは、美しい支那人の女の子です。が、何か苦勞でもあるのか、この女の子の下ぶくれの頬は、まるで蠟ろうのような色をしていました。

「何を愚図々々しているんだえ？　ほんとうにお前位、ずうずうしい女はありやしないよ。きつと又台所で居眠りか何かしていたんだらう？」

惠蓮はいくら叱られても、じつと俯向うつむいた儘まま黙っていました。

「よくお聞きよ。今夜は久しぶりにアグニの神へ、御伺

いを立てるんだからね、そのつもりでいるんだよ。」

女の子はまっ黒な婆さんの顔へ、悲しそうな眼を挙げました。

「今夜ですか？」

「今夜の十二時。好いかえ？　忘れちゃいけないよ。」

印度人の婆さんは、脅すように指を挙げました。

「又お前がこの間のように、私に世話ばかり焼かせる
と、今度こそお前の命はないよ。お前なんぞは殺そうと
思えば、雛ひよっ仔この頸くびを絞めるより——」

こう言いかけた婆さんは、急に顔をしかめました。ふ

と相手に気がついて見ると、恵蓮はいつか窓側まどぎわに行つて、丁度明いていた硝子窓から、寂しい往来を眺めているのです。

「何を見ているんだえ？」

恵蓮は愈いよいよ色を失つて、もう一度婆さんの顔を見上げました。

「よし、よし、そう私を莫迦ばかにするんなら、まだお前は痛い目に会い足りないんだらう。」

婆さんは眼を怒らせながら、そこにあつた箒ほうきをふり上げました。

丁度その途端です。誰か外へ来たと見えて、戸を叩く音が、突然荒々しく聞え始めました。

二

その日のかれこれ同じ時刻に、この家の外を通りかかった、年の若い一人の日本人があります。それがどう思ったのか、二階の窓から顔を出した支那人の女の子を一目見ると、しばらくは呆気あつけにとられたように、ぼんやり立ちすくんでしまいました。

そこへ又通りかかったのは、年をとった支那人の人力車夫です。

「おい。おい。あの二階に誰が住んでいるか、お前は知っていないかね？」

日本人はその人力車夫へ、いきなりこう問いかけました。支那人は楫棒かじぼうを握った儘、高い二階を見上げましたが、「あすこですか？ あすこには、何とかいう印度人の婆さんが住んでいます。」と、気味悪そうに返事をすると、匆々そうそう行きそうにするのです。

「まあ、待ってくれ。そうしてその婆さんは、何を商売

にしているんだ？」

「占い者しゃです。が、この近所の噂じや、何でも魔法さえ使うそうです。まあ、命が大事だったら、あの婆さんの所なぞへは行かない方が好いようですよ。」

支那人の車夫が行ってしまつてから、日本人は腕を組んで、何か考えているようでしたが、やがて決心でもついたのか、さつさとその家の中へはいつて行きました。すると突然聞えて来たのは、婆さんの罵ののしる声に交つた、支那人の女の子の泣き声です。日本人はその声を聞くが早いか、一股ひとまたに二三段ずつ、薄暗い梯子を駈け上りまし

た。そうして婆さんの部屋の戸を力一ぱい叩き出しました。

戸は直ぐに開きました。が、日本人が中へはいつて見ると、そこには印度人の婆さんがたった一人立っているばかり、もう支那人の女の子は、次の間へでも隠れたのか、影も形も見当りません。

「何か御用ですか？」

婆さんはさも疑わしそうに、じろじろ相手の顔を見ました。

「お前さんは占い者だろうか？」

日本人は腕を組んだ儘、婆さんの顔を睨み返しました。

「そうです。」

「じゃ私の用なぞは、聞かなくてもわかっているじやないか？ 私も一つお前さんの占いを見て貰いにやって来たんだ。」

「何を見て上げるんですえ？」

婆さんは益ますます疑わしそうに、日本人の容子ようすを窺うかがって
いました。

「私の主人の御嬢さんが、去年の春行方ゆくえ知れずになつた。それを一つ見て貰いたいんだが、——」

日本人は一句一句、力を入れて言うのです。

「私の主人は香港の日本領事だ。御嬢さんの名は妙子たえこさんとおっしゃる。私は遠藤という書生だが——どうだね？ その御嬢さんはどこにいらっっしゃる。」

遠藤はこう言いながら、上衣の隠しに入れると、一挺のピストルを引き出しました。

「この近所にいらっしやりはしないか？ 香港の警察署の調べた所じゃ、御嬢さんを攫さらったのは、印度人らしいということだったが、——隠し立てをすると為にならんぞ。」

しかし印度人の婆さんは、少しも怖がる気色けしきが見えませんが。見えないうところか唇には、反かえつて人を莫迦にしたような微笑さえ浮べているのです。

「お前さんは何を言うんだえ？ 私はそんな御嬢さんなんぞは、顔を見たこともありませんよ。」

「嘘をつけ。今その窓から外を見ていたのは、確に御嬢さんの妙子さんだ。」

遠藤は片手にピストルを握った儘、片手に次の間の戸口を指さしました。

「それでもまだ剛情を張るんなら、あすこにいる支那人

をつれて来い。」

「あれは私の貰い子だよ。」

婆さんはやはり嘲るように、にやにや独り笑っているのです。

「貰い子か貰い子でないか、一目見りやわかることだ。

貴様がつれて来なければ、おれがあすこへ行つて見る。」

遠藤が次の間へ踏みこもうとすると、咄嗟とつさに印度人の

婆さんは、その戸口に立ち塞ふさがりました。

「ここは私の家だよ。見ず知らずのお前さんなんぞに、奥へはいられてたまるものか。」

「退^どけ。退かないと射殺^{うちころ}すぞ。」

遠藤はピストルを挙げました。いや、挙げようとしたのです。が、その拍子^{ひょうし}に婆^{からす}さんが、鴉^なの啼くような声を立てたかと思うと、まるで電気に打たれたように、ピストルは手から落ちてしまいました。これには勇み立った遠藤も、さすがに胆^{きも}をひしがれたのでしよう、ちよいとの間は不思議そうに、あたりを見廻していましたが、忽ち又勇気をとり直すと、

「魔法使め。」と罵りながら、虎のように婆さんへ飛びかかりました。

が、婆さんもさるものです。ひらりと身を躲かわすが早いか、そこにあつた箒をとつて、又掴みかかろうとする遠藤の顔へ、床の上の五味ごみを掃きかけました。すると、その五味が皆火花になつて、眼といわず、口といわず、ばらばらと遠藤の顔へ焼きつくのです。

遠藤はとうとうたまり兼ねて、火花の旋風つむじかぜに追われながら、転ころげるように外へ逃げ出しました。

三

その夜の十二時に近い時分、遠藤は独り婆さんの家の前にたたずみながら、二階の硝子窓に映る火影ほかげを口惜くやしそうに見つめていました。

「折角御嬢さんの在ありかをつきとめながら、とり戻すことが出来ないのは残念だな。一そ警察へ訴えようか？ いや、いや、支那の警察が手ぬるいことは、香港でもう懲こり懲ごりしている。万一今度も逃げられたら、又探すのが一苦労だ。といってあの魔法使には、ピストルさえ役に立たないし、——」

遠藤がそんなことを考えていると、突然高い二階の窓

から、ひらひら落ちて来た紙切れがあります。

「おや、紙切れが落ちて来たが、——もしや御嬢さんの手紙じゃないか？」

こう呟いた遠藤は、その紙切れを、拾い上げながらそつと隠した懐中電燈を出して、まん円な光に照らして見ました。すると果して紙切れの上には、妙子が書いたのに違いない、消えそうな鉛筆の跡があります。

「遠藤サン。コノ家^{ウチ}ノ才婆サンハ、恐シイ魔法使デス。時々真夜中ニ私ノ体へ、『アグニ』トイウ印度ノ神ヲ乗

リ移ラセマス。私ハソノ神ガ乗リ移ツテイル間中、死ン
ダヨウニナツテイルノデス。デスカラドンナ事ガ起ルカ
知リマセンガ、何デモオ婆サンノ話デハ、『アグニ』ノ
神ガ私ノ口ヲ借リテ、イロイロ予言ヲスルノダソウデス。
今夜モ十二時ニハオ婆サンガ又『アグニ』ノ神ヲ乗リ移
ラセマス。イツモダト私ハ知ラズ知ラズ、氣ガ遠クナツ
テシマウノデスガ、今夜ハソウナラナイ内ニ、ワザト魔
法ニカカッタ真似ヲシマス。ソウシテ私ヲオ父様ノ所へ
返サナイト『アグニ』ノ神ガオ婆サンノ命ヲトルト言ッ
テヤリマス。オ婆サンハ何ヨリモ『アグニ』ノ神ガ怖イ

ノデスカラ、ソレヲ聞ケバキツト私ヲ返スダロウト思イ
マス。ドウカ明日アシタノ朝モウ一度、オ婆サンノ所へ来テ下
サイ。コノ計略ノ外ニハオ婆サンノ手カラ、逃ゲ出スミ
チハアリマセン。サヨウナラ。」

遠藤は手紙を読み終ると、懐中時計を出して見ました。
時計は十二時五分前です。

「もうそろそろ時刻になるな、相手はあんな魔法使だ
し、御嬢さんはまだ子供だから、余程運が好くないと、
——」

遠藤の言葉が終らない内に、もう魔法が始まるのでしよう。今まで明るかった二階の窓は、急にまっ暗になってしまいました。と同時に不思議な香の匂こうが、町においの敷石にも滲しみる程、どこからか静に漂って来ました。

四

その時あの印度人の婆さんは、ランプを消した二階の部屋の机に、魔法の書物を拵しきりげながら、頻しきりに呪文を唱えていました。書物は香炉こうろの火の光に、暗い中でも文字

だけは、ぼんやり浮き上らせているのです。

婆さんの前には心配そうな恵蓮が、——いや、支那服を着せられた妙子が、じつと椅子に坐っていました。さつき窓から落した手紙は、無事に遠藤さんの手へはいたであろうか？ あの時往来にいた人影は、確に遠藤さんだと思っただが、もしや人違いではなかつたであろうか？——そう思うと妙子は、いても立ってもいられないような気がして来ます。しかし今うっかりそんな気^けぶりが、婆さんの眼にでも止まったが最後、この恐しい魔法使いの家から、逃げ出そうという計略は、すぐに見破ら

れてしまおうでしょう。ですから妙子は一生懸命に、震える両手を組み合せながら、かねてたくんで置いた通り、アグニの神が乗り移ったように、見せかける時の近づくの今か今かと待っていました。

婆さんは呪文を唱えてしまおうと、今度は妙子をめぐりながら、いろいろな手ぶりを始めました。或時は前へ立った儘、両手を左右に挙げて見たり、又或時は後へ来て、まるで眼かくしでもするのように、そつと妙子の額ひたいの上へ手をかざしたりするのです。もしこの時部屋の外から、誰か婆さんの容子ようすを見ていたとすれば、それはき

つと大きな蝙蝠こうもりか何かが、蒼白い香炉の火の光の中に、飛びまわってでもいるように見えたでしょう。

その内に妙子はいつものように、だんだん睡気ねむけがきざざして来ました。が、ここで睡ってしまつては、折角の計略にかけることも、出来なくなつてしまふ道理です。そうしてこれが出来なければ、勿論二度とお父さんの所へも、帰れなくなるのに違いありません。

「日本の神々様、どうか私が睡らないように、御守りなすつて下さいまし。その代り私はもう一度、たとい一目でもお父さんの御顔を見ることが出来たなら、すぐに死

んでもよろしゅうございます。日本の神々様、どうかお婆さんを欺だませるように、御力を御貸し下さいまし。」

妙子は何度も心の中に、熱心に祈りを続けました。しかし睡気はおいおいと、強くなつて来るばかりです。と同時に妙子の耳には、丁度銅鑼どらでも鳴らすような、得え体たいの知れない音楽の音が、かすかに伝わり始めました。これはいつでもアグニの神が、空から降りて来る時に、きつと聞える声なのです。

もうこうなつてはいくら我慢しても、睡らずにいることは出来ません。現に目の前の香炉の火や、印度人の婆

さんの姿でさえ、気味の悪い夢が薄れるように、見る見る消え失うせてしまうのです。

「アグニの神、アグニの神、どうか私の申すことを御聞き入れ下さいまし。」

やがてあの魔法使いが、床の上にひれ伏した儘、しわが 噎れた声を挙げた時には、妙子は椅子に坐りながら、殆ど生死も知らないように、いつかもうぐっすり寝入っていました。

五

妙子は勿論婆さんも、この魔法を使う所は、誰の眼にも触れないと、思っていたのに違いありません。しかし実際は部屋の外に、もう一人戸の鍵穴から、覗のぞいている男があつたのです。それは一体誰でしょうか？——言うまでもなく、書生の遠藤です。

遠藤は妙子の手紙を見てから、一時は往來おうらいに立ったなり、夜明けを待とうかとも思いました。が、お嬢さんの身の上を思うと、どうしてもじつとしてはいられません。

そこでとうとう盗人のように、そつと家の中へ忍びこむと、早速この二階の戸口へ来て、さつきから透き見すみをしていたのです。

しかし透き見をしてみると言っても、何しろ鍵穴を覗くのですから、蒼白い香炉の火の光を浴びた、死人のような妙子の顔が、やっと正面に見えるだけです。その外は机も、魔法の書物も、床にひれ伏した婆さんの姿も、まるで遠藤の眼にははいりません。しかししわが呟れた婆さんの声は、手にとるようにはつきり聞えました。

「アグニの神、アグニの神、どうか私の申すことを御聞

き入れ下さいまし。」

婆さんがこう言ったと思うと、息もしないように坐っていた妙子は、やはり眼をつぶった儘、突然口を利き始めました。しかもその声がどうしても、妙子のような少女とは思われない、荒々しい男の声なのです。

「いや、おれはお前の願いなぞは聞かない。お前はおれの言いつけに背そむいて、いつも悪事ばかり働いて来た。おれはもう今夜限り、お前を見捨てようと思っている。いや、その上に悪事の罰を下してやろうと思っている。」

婆さんは呆あっけ気にとられたのでしよう。暫しばしくは何とも

答えずに、喘ぐあえような声ばかり立てていました。が、妙子は婆さんに頓着せず、おごそかに話し続けるのです。

「お前は憐れな父親の手から、この女の子を盗んで来た。もし命が惜しかったら、明日とも言わず今夜の内に、早速この女の子を返すが好い。」

遠藤は鍵穴に眼を当てた儘、婆さんの答を待っていました。すると婆さんは驚きでもするかと思いの外、憎々しい笑い声を洩らしながら、急に妙子の前へ突っ立ちました。

「人を莫迦ばかにするのも、好い加減におし。お前は私を何

だと思っっているのだえ。私はまだお前に欺こぼされる程、耄碌もうろくはしていない心算つもりだよ。早速お前を父親へ返せ——警察の御役人じやあるまいし、アグニの神がそんなことを御言いつけになつてたまるものか。」

婆さんはどこからとり出したか、眼をつぶつた妙子の顔の先へ、一挺のナイフを突きつけました。

「さあ、正直に白状おし。お前は勿体もったいなくもアグニの神の、声色こわいろを使つているのだらう。」

さつきから容子を窺つていても、妙子が実際睡つてい
ることは、勿論遠藤にはわかりません。ですから遠藤は

これを見ると、さては計略が露頭ろけんしたかと思わず胸を躍らせました。が、妙子は相変らず目蓋まぶた一つ動かさず、嘲笑あざわらうように答えるのです。

「お前も死に時が近づいたな。おれの声がお前には人間の声に聞えるのか。おれの声は低くとも、天上に燃える炎の声だ。それがお前にはわからないのか。わからなければ、勝手にするが好い。おれは唯お前に尋ねるのだ。すぐにこの女の子を送り返すか、それともおれの言いつけに背くか——」

婆さんはちよいとためらったようです。が、たちま忽ち勇

気をとりに直すと、片手にナイフを握りながら、片手に妙子の頭髪を掴んで、ずるずる手もとへ引き寄せました。

「この阿魔あまめ。まだ剛情を張る気だな。よし、よし、それなら約束通り、一思いに命をとってやるぞ。」

婆さんはナイフを振り上げました。もう一分間遅れても、妙子の命はなくなります。遠藤は咄嗟とつさに身を起すと、錠のかかった入口の戸を無理無体に明けようとしませんでした。が、戸は容易に破れません。いくら押しても、叩いても、手の皮が摺すり剥むけるばかりです。

六

その内に部屋の中からは、誰かのわっと叫ぶ声が、突然暗やみに響きました。それから人が床の上へ、倒れる音も聞えたようです。遠藤は殆ど気違いのように、妙子の名前を呼びかけながら、全身の力を肩に集めて、何度も入口の戸へぶつかりました。

板の裂ける音、錠のはね飛ぶ音、——戸はとうとう破れました。しかし肝腎の部屋の中は、まだ香炉に蒼白い火がめらめら燃えているばかり、人気のないようにしん

としています。

遠藤はその光を便りに、お 怯ず怯ずあたりを見廻しました。

するとすぐに眼にはいったのは、やはりじつと椅子にかけた、死人のような妙子です。それが何故なぜか遠藤には、頭に毫光ごうこうでもかかっているように、な 厳かな感じを起させました。

「御嬢さん、御嬢さん。」

遠藤は椅子へ行くと、妙子の耳もとへ口をつけて、一生懸命に叫び立てました。が、妙子は眼をつぶったなり、

何とも口を開きません。

「御嬢さん。しつかりおしなさい。遠藤です。」

妙子はやっとな夢がさめたように、かすかな眼を開きました。

「遠藤さん？」

「そうです。遠藤です。もう大丈夫ですから、御安心なさい。さあ、早く逃げましょう。」

妙子はまだ夢現ゆめうつのように、弱々しい声を出しました。

「計略は駄目だったわ。つい私が眠ってしまったものだから、——堪忍して頂戴よ。」

「計略が露頭したのは、あなたのせいじゃありませんよ。あなたは私と約束した通り、アグニの神の憑かかった真似をやり了おおせたじゃありませんか？——そんなことはどうでも良いことです。さあ、早く御逃げなさい。」

遠藤はもどかしそうに、椅子から妙子を抱き起しました。

「あら、嘘。私は眠ってしまったのですもの。どんなことを言ったか、知りはしないわ。」

妙子は遠藤の胸に凭もたれながら、眩つぶやくようにこう言いました。

「計略は駄目だったわ。とても私は逃げられなくつてよ。」

「そんなことがあるものですか。私と一しよにいらつしやい。今度しくじつたら大変です。」

「だつてお婆さんがいるでしょう？」

「お婆さん？」

遠藤はもう一度、部屋の中を見廻しました。机の上にはさっきの通り、魔法の書物が開いてある、——その下へ仰向きあおむに倒れているのは、あの印度人の婆さんです。婆さんは意外にも自分の胸へ、自分のナイフを突き立て

た儘、血だまりの中に死んでいました。

「お婆さんはどうして？」

「死んでいます。」

妙子は遠藤を見上げながら、美しい眉をひそめました。

「私、ちっとも知らなかったわ。お婆さんは遠藤さんが

——あなたが殺してしまったの？」

遠藤は婆さんの屍骸しかいから、妙子の顔へ眼をやりました。

今夜の計略が失敗したことが、——しかしその為に婆さんも死ねば、妙子も無事に取り返せたことが、——運命の力の不思議なことが、やっと遠藤にもわかったのは、

この瞬間だったのです。

「私が殺したのじゃありません。あの婆さんを殺したのは今夜ここへ来たアグニの神です。」

遠藤は妙子を抱かかえた儘、おごそかにころう囁ささやきました。

（大正九年十二月）

日本文学電子図書館

アグニの神

著 者：芥川龍之介

制作者：宮澤一郎

底 本：現代日本文学大系43 芥川龍之介集
筑摩書房

昭和43年8月25日 初版第一刷発行



日本文学電子図書館